

論文要約

# ジャワ時代の武田麟太郎

広島大学大学院教育学研究科 博士課程後期  
文化教育開発専攻日本語教育学分野

**D133969**

**SYAHRUR MARTA DWISUSILO**

シャルル マルタ ドウイスシロ

## I. 論文構成（目次）

### 序章

- 第一節 研究の背景および範囲
- 第二節 先行研究および研究方法
  - (一) 武田麟太郎の批判
  - (二) インドネシア文化観

### 第一章 ジャワ・バリ全島巡回の旅

- はじめに
- 第一節 「ジャワ」の初日
- 第二節 イスラム文化との接触
- 第三節 おとぎ話の世界
- 終わりに

### 第二章「南進」著作の受容

- はじめに
- 第一節 「爪哇」認識
- 第二節 表象の連鎖
- 終わりに

### 第三章「同一性」言説について

- はじめに
- 第一節 「なつかしさ」の連想
- 第二節 他者の分裂
- 終わりに

### 第四章 武田麟太郎と啓民文化指導所

- はじめに
- 第一節 宣伝活動について
- 第二節 啓民文化指導所の設立
- 第三節 啓民文化指導所の文学
  - (一) 出版事業の状況
  - (二) 戦時文芸作品賞
- 第四節 青年文学会
- 終わりに

## 第五章 武田麟太郎とパネ兄弟

はじめに

第一節 武田麟太郎とクロンチョン

第二節 アルミン・パネと『桎梏』

第三節 サヌシ・パネと「東洋の理想」

おわりに

## 終章

主要文献目録

補助資料

## II. 各章の概要

### 序章

#### 第一節 研究の背景および範囲

国の動員により、多くの文化人がアジア地域に滞在したのは、太平洋戦争の時期であった。無論、戦前においても、南洋および南方を訪れた人物は多い。南進論の原点ともいわれる竹越与三郎、生物学者としての徳川義親らの知識人は、戦前すでにジャワを訪れていた。しかし、彼らの視察においては、原住民との接触や交流も少なく、訪れた地域に残したものがほとんど見当たらない。

近年、日本の占領地域に派遣された「ペン部隊」についての研究が進み、戦争に巻き込まれた文化人の存在が広く知られるようになってきた。太平洋戦争勃発とともに、文化人を軍属の身分で戦場に派遣する徴用が国策として実施された。文化人たちは、ビルマ、英領マレーなどの東南アジア地域にも送られたが、石油戦争とも言われる太平洋戦争においては、資源豊富な蘭領印度（現インドネシア）が、占領地として最も重要な地域であったことはいうまでもない。

インドネシアの中心となるジャワ島方面においては、浅野晃（評論家）、阿部知二（小説家）、大江賢次（小説家）大木惇夫（詩人）、大宅壮一（評論家）、北原武夫（小説家）、郡司次郎正（小説家）、武田麟太郎（小説家）、富沢有為男（小説）といった文学者の名前が挙げられる。木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』（世界思想社、二〇〇四年）には、これについての詳しい記述がある。徴用は、一九三七年以降、すべての日本国民を巻き込んだ国民精神総動員運動および国家総動員法などの、国民動員と一貫するものであった。この「南方徴用作家」はナチスドイツのP・K（Propaganda Kompagnie）部隊から発想した宣伝部隊であるが、その任務の内容は、日中戦争で活動した軍部の報道員とは異なり、文化工作を実施するとともに、原住民との交流も重視した。戦意高揚や戦況情報の提供とともに、文化視察による彼らの報道が、現地にも内地（日本）にも広く伝わり、この地域の文化が日本人に最も身近になった。さらに、原住民との交流により、多様なテキストが生まれており、この作家たちを個別に研究する必要がある。

ジャワ方面の徴用作家の中に、元左翼の活動家が多く存在したことも、一つの特徴としてあげられる。浅野晃、大江賢次、大宅壮一、武田麟太郎といった人物は、戦前の左翼運動に参加したことがあり、社会主義を信念とした作家たちであった。なかでも、武田麟太郎は特殊な存在である。徴用の任期は長くとも一年であったが、武田麟太郎はこの徴用期間を自らの希望で一九四二年十一

月まで半年間延長した。さらに、一九四三年に再び半年延長した。帰国を好まなかった徴用作家は、武田麟太郎のみであった。

武田麟太郎は占領期インドネシアの文学および文化活動を担った重要な人物の一人である。徴用延長期間において、彼は「啓民文化指導所」(Poesat Keboedajaan) 文学部の指導者となった。「啓民文化指導所」は、占領下インドネシアの文化活動の中心となった総合機関として、一九四三年四月一日にジャカルタで日本の軍政監部によって設立された。そこに動員された、サヌシ・パネ(Sanusi Pane)、アムリン・パネ (Amrinj Pane)、ウスマル・イスマイル (Usmar Ismail) などの多くの高名なインドネシア人文学者が、この組織にかかわった。この組織を通じて、武田麟太郎はインドネシア人文学者と交流を行い、彼らを好意的に描いている。本論文では、第三の問題として、武田麟太郎が交流したインドネシア人文学者とどのような共通点があったのかを、比較文学の観点から考察する。

## 第二節 先行研究および研究方法

### (一) 武田麟太郎の批判

ドナルド・キーン(一九六三年)は、太平洋戦争下の日本文学に全面的な戦争批判の表現がほとんどなく、戦争批判という理由で国から脱走したり、亡命したりした文学者も見られないと述べている。国内では勝利の感激や天皇崇拜などの文学作品が氾濫し、さらに東南アジアの占領地まで拡大したと指摘している。

これに対し神谷忠孝(一九八二年)は、この意見を否定してはいないものの、武田麟太郎を最もインドネシアに愛着を持った人物、戦争に対する複雑な想いをもつ文学者として取り上げた。「自分たちのインドネシアに対する広い無限の愛情、彼らの日本人への深い無限の信頼は、美しいジャワ島では、まことに固く結ばれ、着々大東亜文化共栄圏の理想はすすんであるのである」という『ジャワ更紗』の文章を引いて、武田麟太郎はインドネシアの独立を真に願っていたと指摘している。

武田麟太郎が宣伝宣撫部隊の中で最もインドネシアへの愛情を示した人物であることは、数多くの証言および先行研究で論じられている。たとえば、帰国後の武田麟太郎が軍部や役所に出入りしてインドネシア独立を促し、説得活動を積極的に行っていたこともよく知られている。これは、元ジャワ宣伝部隊長町田啓二の『戦う文化部隊』(一九六七年)の回想および、浅野晃『浪漫派変転』(一九八八年)の証言によるものである。しかし、この武田麟太郎のインドネシア独立との関与についての証言は、戦後のものであり、必ずしも高く評価されてはいない。

大谷晃一『評伝武田麟太郎』（一九八二年）では、ジャワ時代の作品が少ないのは、武田麟太郎に当時の軍部に対する反感があったためであると述べられている。この大谷晃一の見解は、戦前における武田麟太郎の運動および思想に基づくものである。つまり、ジャワ時代の活動を、プロレタリア文学運動の延長線として捉えているのである。同様に、田口道昭（一九九二年）はジャワ滞在中に書かれた作品について、六月二十六日にインドネシア人の政治に関する言動、民族歌、民族旗が禁じられた時点で文学的な文章が見られなくなったことから、武田麟太郎の軍部への反抗を強調する。さらに、ジャワでの日本語教育のあり方について、「古い植民地意識に根拠をもつ言語政策」を引いて、武田麟太郎は、愚民政策、古い植民地政策、ヨーロッパ的植民地など、当時の文化観に批判的であったと述べている。田口道昭、及川敬一など多くの研究者が指摘するように、武田麟太郎が批判したのは植民地政策の観点に立った実利主義的思考方である。これは帰国後のインドネシア独立への想いと繋がっている。さらに田口は、「戦争の時は不勉強」だったと述べた戦後の反省および、小説『田舎者歩く』（一九四六年）の主人公の人格描写を見て、武田麟太郎は自己批判も行っていると述べている。

及川敬一（一九九六年）は、インドネシア独立を約束した小磯首相声明への言及に注目し、武田麟太郎がインドネシア人とともに歓喜したと指摘している。これは、内地帰還後の武田麟太郎が、インドネシアの代表的な文学者アルミン・パネ宛の「手紙」を『ジャワ更紗』最終章に収録したことによる。このアルミン・パネとは「肝胆相照らす仲になり、インドネシアの独立とインドネシアへの愛を認め合った」とされている。このインドネシア人文学者アルミン・パネ宛の「手紙」における、インドネシアへの共感とともに、インドネシアを目覚めさせた「大東亜共栄圏」の理想への賛美が込められていると強調している。しかし、河西晃祐（二〇〇二年）は、「大東亜共栄圏」という偽装のスローガンを本心から信じた武田麟太郎の願ったインドネシアの独立は、スカルノ／ハッタをはじめ、アルミン・パネが願ったインドネシア独立とは異なり、あくまでも大日本帝国下の「独立」にすぎなかったことを強調している。武田麟太郎の評価については、太平洋戦争における歴史認識の立場によって、意見が分かれている。このような抵抗と批判を抱えていた武田麟太郎像は、彼のインドネシア文化観の議論にも繋がってゆく。

## （二）インドネシア文化観

神谷忠孝は、南方徴用作家の作品について以下のように分類している。一つは、大東亜共栄圏を信じ、体制側に都合の良い部分だけを報道したものである。二つ目は、報道や伝聞による先入観を現地で確認して報道したものである。三

つ目は、自己の感性を頼りにして、心に触れた出来事を書いたものである。四つ目は、先人の書いたものを確認しながら、現地の人と積極的に接触しつつ報道したものである。武田麟太郎はこの第四のタイプに属している。ジャワ時代の武田麟太郎のインドネシア文化の肯定的な描写は高く評価されている。特に、代表作『ジャワ更紗』においては、原住民（インドネシア人）に対する偏見が見られない。

姫本由美子（二〇一一年）は「旅だより」における川でのマンディー（水浴び）などのジャワの生活習慣の描写を取り上げ、武田麟太郎がそれを日本のものとは異なる奇異なものとしてではなく、現地の自然環境の中で育てられた生活習慣としてごく自然なものとして描いていると述べ、武田麟太郎はジャワに日本と共通の感覚を覚えていたと指摘している。

一方、『ジャワ更紗』の冒頭には、「帰つて来てみて眼につく出版物は、やはりジャワを中心とした東印度関係書、しかもその氾濫である。もう目録や広告だけで手に入らないものも多いが、手当たり次第に興味の惹くままに読んでみると、「案外信用出来るのが少ないやうだ」と、当時のインドネシア観に対する批判が見られる。

これに対して奥出健（一九九八年）は、この戦時中の書物については、武田麟太郎が帰国後すぐに見る可能性があったのは、井岡『ジャワを中心とした南方の実相』および、飯島幡司『南風に翔る』であると指摘している。しかしこれらの書は、インドネシアを好意的に書いており、物質的な見方および軽蔑の表現がほとんどないとも述べている。インドネシアを冷笑した、中山寧人大佐「蘭印の現況とその動向」（一九四一年九月）という現地報告もあるにはるが、武田麟太郎が最も批判したのは、一九四四年（昭和十九年）に出版された『蘭印何々』という著作であった。いずれにしても、武田麟太郎がこれらの書物を読んだ証拠はない。

河西晃祐（二〇〇二年）は、武田麟太郎が『ジャワ更紗』でオランダを「毛唐」と呼んでおり、インドネシアへの肯定的な姿勢は西洋人への偏見を前提としているとし、「八紘一字」と「大東亜」を出現させるために西洋の排除が行われていると述べ、「大東亜共栄圏」言説との関わりに注目する。

以上、ジャワ時代の武田麟太郎の研究を幾つかの論から概観してみたが、インドネシアへの愛着が、戦時中の武田麟太郎の研究においては最も重要な論点となっている。これに関しては、『ジャワ更紗』に記載されたインドネシア人文学者、アルミン・パネ宛の「手紙」に基づいているものが多い。しかし、武田麟太郎と他のインドネシア人文学者との交流、特にパネ兄弟との関係については、十分に論じられていないのが現状である。

本論文の研究方法としては、二つ方向に進む。第一は、『ジャワ更紗』を中心とした、インドネシア体験に基づく武田麟太郎の作品群の分析である。主に武田麟太郎と帝国主義的言説との向き合い方を論じる。明治末期からの南進論著作との比較によって、インドネシア観の変容過程について明らかにする。

武田麟太郎の指導下にあった啓民文化指導所の文学者の視点から、インドネシアにおける戦時中の武田麟太郎の活躍を歴史の資料に照らしつつ、実証的に明らかにすることが研究の第二の方向である。

## 第一章 ジャワ・バリ巡回の旅

第一章では、武田麟太郎のジャワ・バリ巡回の文化視察について論じる。武田麟太郎は、一九四二年三月一日の夜明けにジャワ海戦の中でジャワに上陸した。その一か月後、ジャワ・バリ全島を自動車一周する「ジャワ・バリ巡廻宣撫隊」が組織された。この「ジャワ・バリ巡廻宣撫隊」のメンバーは、宣伝班の部隊を中心に、特派員、映画関係者、漫画家、インドネシア人の踊り子と歌手、合わせて三十人であった。武田麟太郎は、陸軍報道班員の一人として、この約二か月の「ジャワ・バリ巡廻」の命令を受けた。この組織の任務は、原住民に対する宣伝宣撫工作をはじめ、ジャワの各地に駐在中の日本兵を慰問することであった。一方、宣伝部隊の資料がバンタム湾海戦によって紛失するなどの被害があったため、文化資料の収集も重要な任務だった。この任務に対して、武田は巡回途中のジョグジャカルタ(Jogjakarta)で「出来るだけ沢山、欲深く自分に得て行き度いと考へてゐます」と述べており、彼の生き生きとした姿がうかがわれる。現地文化と接触したいという個人的な願望があったことは、明らかである。

これらの文化視察の記録は、『朝日新聞』の漫画「フクチャンシリーズ」をはじめ、ジャワの現地新聞『うなばら』などに連載された。帰国後に創作した彼のエッセイ『ジャワ更紗』においても重要な素材となっている。

武田麟太郎が、主に映画の上演や芝居などの宣伝活動を行ったが、二つの異文化を遭遇した。第一は、タシクマラヤ(Tasikmalaya)で宿主の子供の割礼というイスラム儀式の視察である。さらに、タシクマラヤのバミジャハン(Pamijahan)に行き、バミジャハンの村ではイスラム指導者、セー・アブドル・モツフイ(Syekh Abdul Muhyi)のお墓を訪れた。このタシクマラヤでの文化体験は、彼のイスラムへの関心の最大のきっかけとなった。ジャワ徴用後、武田麟太郎は一般に内地に伝わっていたインドネシア文化への誤解や冷笑を改める中で、特にイスラムに焦点を当てている。彼は常に、インドネシアを日本と同じ東洋地域の一部であると強調している。内地帰還後の作品『ジャワ更紗』に



見られるように、一夫多妻制度についても彼は肯定しており、このジャワのイスラム文化を代弁している。さらに、ジャワのイスラムを独特な東洋文化と解釈したが、これは価値転換を狙う考え方である同時に、日本の文化と連携させる処置であった。

第二は、武田麟太郎が、ジャワの美に感心したのは、古代ジャワの仏教文明を象徴するボロブドゥールの存在である。武田麟太郎が最初にボロブドゥールを訪れたのは、ジョグジャカルタに向かう途中であった。次の日、武田麟太郎は再びジョグジャカルタからマゲラン(Magelang)に戻り、ボロブドゥールを撮影に行った武田麟太郎は、ボロブドゥール遺跡の撮影の往復で、「ボロブドゥールとは多くの仏たち」を意味しているとし、仏教文化を共有する日本との一体感と呼び起こす。偉大な古代アジア文明が存在するというジャワ表象には、日本の本土との連帯感が投影されている。

天長節を迎えた映画会でジョグジャカルタのスルタン（王様）が招待され、武田はスルタンと対面した。武田麟太郎はジャワ文化の中心スラカルタ(Surakarta)とジョクジャカルタの町を、昔のおとぎ話のような世界として描いている。このジャワ全島巡回の一行は全員スラバヤに集合した後、バリ島に渡った。バニュワンギー(Banyuwangi)からフェリーでバリ島に渡る港で、武田麟太郎は、バリの光景を、ジャワ同様、しばしば日本を連想させる場面として描き出した。このような表象は、この二か月の武田麟太郎のジャワ・バリ文化見聞において頻出していることが判明した。

## 第二章 「南進」 著作の受容

第二章は、戦時中のインドネシア、とりわけジャワ像の変容を明らかにする試みとして、『ジャワ更紗』における南進論著作の存在と、これに対する武田麟太郎の姿勢について論じる。

武田麟太郎は『ジャワ更紗』において、従来日本で出版されていたインドネシア関係書に対して批判を行った。武田麟太郎が最も批判したのは、一九四四年に出版された『蘭印何々』という著作であった。ただし、この著作は実物を確認できない。一方、『ジャワ更紗』において、伊藤直矢『金儲けの爪哇』(一九一一年)、江川薫『南洋を目的に』(一九一三年)、加藤鏖五郎『蘭印は動く』(一九四一年)、入江寅次『明治南進史稿』(一九四三年)などの書名を記し、それらの文章を引用している。

武田は「日本人に対するインドネシア人の信頼感と親密感」の原因を探るという設定で『金儲けの爪哇』と出会い、戦前に蘭印(インドネシア)へ進出した商人たち、いわゆるジャワ在留邦人の貢献を語り始める。武田の歴史語りに

おける文献の出発点は、伊藤直矢の『金儲けの爪哇』にあった。『金儲けの爪哇』は、主にジャワでの商業のノウハウを提供するものであるが、『金儲けの爪哇』における「独り大和民族の祖先たる馬來人種の故郷たり、又徳川氏中世に於ける吾が不遇英雄の功名地たりし点より云つて、吾が日本との関係は蓋し少からざるものである」という過去のロマン的關係に連続している。このような歴史観は、『金儲けの爪哇』より一年前に出版された『南国記』に既に見ることができる。『南国記』の重要な点は日本人を南方起原の「南人」と捉え、日本人の「北進」は歴史の約束に反するという主張にあった。この南方起源論は、江川薫の『南洋を目的に』にも影を落としている。江川薫は、「南へは近時識者の定論なり」という『南国記』の名言を引用しており、インドネシアと日本の間の深い関係を豊臣秀吉の時代にまでさかのぼり、インドネシアに渡り海賊のリーダーとなった長崎出身の商人、原田孫次郎の伝説とつなげている。

武田麟太郎も、この南進論的な南方起源論と全く無関係だったわけではない。彼は、インドネシア人との同一性論も展開しており、『なつかしい風物』（一九四二年）において、「ここはたしかに一度来たことがあるといふ感じがして、全くはじめて踏んだ土地とは思はれない。自分の血のなかには、ここをよく知つてゐるものが流れてゐるのを自覚するのだ」と述べることによってこの南方起源論を連想させる。明治末期の南進論著作以来継続してきた日本人の南方起源論も、武田麟太郎に影響を及ぼしていることが明かである。

しかし、武田麟太郎が、これらの南進論著作におけるインドネシア像の偏見を変容していた。武田麟太郎は、南進論の著作から引用を行う一方で、偏見に基づく文明観も批判している。武田の批判の鋒先は、「毛唐流の立場と見方」並びに、「同じ原本」および「内容の重複」にあった。つまり、武田麟太郎の批判の対象は、これまでインドネシア言説における偏ったイメージの連鎖にも向けられていたのである。

### 第三章 「同一性」論という方法

第一章および第二章に見られるように、「同じアジア人」という同一性の言説は、日本植民地支配の正当性を補強する論理として機能したという点で、ジャワ時代の武田麟太郎作品は、オリエンタリズムの変容と見なすことができる。しかし、本来、漢字圏、儒教圏といった、文化的にも思想的にも共通する国々にのみ適用できる考え方である。つまり、長い歴史の中で、日本人の意識に既にあった西洋（オクシデント）と対照的な概念としての東洋（オリエント）の理念化である。

第三章では、武田麟太郎による日本的オリエンタリズムについて論じる。武田のインドネシアとの同一性の語りの中で、西洋は他者であったと言っても過言ではない。たとえば、インドネシアにおける一夫多妻のイスラム制度を肯定する際にも、「イスラムを蓄妾主義的な宗教であると世界に宣伝をつとめたキリスト教側の謀略である」と述べ、西洋のキリスト教をジャワのイスラムと対立するものと捉えている。

しかし、『ジャワ更紗』におけるこのような否定的認識は、日本人である「僕」との差異を強調するというよりは、むしろ日本人と外見的に似た他のアジア人との差異を浮かび上がらせる。つまり、インドネシアに住む華僑の問題である。

サイドのオリエンタリズム論における他者の認識においては、帝国主義と植民地化のもとでの西洋の偏見と、異国としての中東やアジアに対するエキゾティシズムの奇妙な絡み合いの感情が両立している。それに対し西原大輔は、日本の場合、他者としての中国認識においては、近代化に遅れたアジアの国々に対する偏見が過去の美への憧れとしての「支那趣味」と結びついたと指摘している。このようなオリエンタリズムの要素は、昭和時代にも引き継がれ、インドネシアにおける武田麟太郎の他者認識にも残っている。『ジャワ更紗』におけるインドネシア人の性格描写には、それが明確に示されている。

華僑に関する表現は、金、利子、商売などの言葉とかがわっており、「支那」は経済を連想させ、権力との関係においては、インドネシア人の支配者として出現している。つまり、『ジャワ更紗』においては、思想の支配者としての「西洋人」「毛唐人」に対し、経済的な支配者は「支那人」とされている。このような経済的イメージと他者としての「支那」の出現は、ある狙いと意味を含んでいた。それは、武田が行う批判を可能にする仕掛けであり、当時の母国の政策に対する批判的な考え方を表現する装置であった。内地（日本）によるインドネシア認識のあり方への批判は、他者としての西洋への批判でもあった。換言すれば、西洋を他者として出現させることにより、武田の思想的文化的批判が行われたのである。これと同じように、他者としての「支那」を登場させることにより、武田が経済的な視点で批判を行ったことを示している。つまり、インドネシアにおける日本の経済政策のあり方への批判である。

武田麟太郎は、インドネシア人の貧しさに共感し、「インドネシア人の生活は低すぎる、悲惨すぎるよ」とよく口にしていた。そのため、日本に全面的に向かいかねない武田の批判は、他者としての「支那」に向かい、隠蔽した形で表現された。他者の存在が分裂することは、ジャワにおける日本的オリエンタリズムの特徴である。

## 第四章 啓民文化指導所とインドネシア文学

第四章では、この啓民文化指導所における武田麟太郎の宣伝活動および、インドネシア文学との関わりについて考察する。

一九四二年四月に「ジャワ・バリの巡回」という文化的な宣伝活動を開始したが、武田麟太郎はこの初期の宣伝活動において、主に芝居の演出を担当した。一方、ジャカルタ芸術センター（**Badan Pusat Kesenian Jakarta**）が、一九四二年十月六日にジャワ軍政監部によって結成された。この組織の理事長はスカルノと言われているが、実際に活躍したのは、所長のサヌシ・パネ（**Sanoesi Pane**）をはじめ、カマジャヤ（**Kamadjaja**）、アルミン・パネ（**Armijn Pane**）などの有名なインドネシアの文化人である。ジャカルタ芸術センターは、演劇を中心とした宣伝活動を行い、そこで、武田麟太郎の有名なエピソードが生まれた。彼は劇団「アジアの光（**Cahaya Asia**）」を公演した。富沢有為男と舞台中央に立ち、新興民族万歳と絶叫した。しかし、演劇研究所は一九四三年一月三日に正式に解散し、啓民文化指導所の演劇部に吸収された。武田麟太郎は啓民文化指導所の設立によって文学部指導の任命を受け、さらに、徴用期間を半年延長された。

啓民文化指導所のジャカルタ本部は、軍政監部によって設立され、一九四三年四月一日に正式に発足した。その開所式は一四月八日に行われた。四月二日にジャカルタ市ノールドウエイ三九番地（のちに本部となる）で初顔あわせが行われ、啓民文化指導所の役員及び職員が決定されたのは、四月三日であった。

啓民文化指導所は、インドネシア語で「**Poesat Keboedajaan**」と称され、文化センターを意味している。この機構について、啓民文化指導所で活躍したH・B・ヤシン（**H.B. Jassin**）は、ドイツの文化指導所（**Kulturkammer**）に類似していると述べている。武田麟太郎が勤務した啓民文化指導所の文学部事業の内容については、「マライ語機関紙 **Keboedajaan Timoer**（東方文化の発行）、翻訳事業、青年文学会の開催、大東亜小説募集、現地職場への作家派遣、啓蒙文化講座の開催、外部との連携事業、新聞雑誌へ小説の提供斡旋、放送劇の創作出演、映画脚本の提供、映画台辞の翻訳、学校劇団その他各団体に対する演劇脚本の修文と提供、音楽部への作詞提出、日本人作家との交流、巡回慰問隊への脚本提供」と詳細に規定されている。これらの文学の事業は、主に雑誌『ジャワ・バルー』と『東方文化』を通じて実行された。

武田麟太郎がこの文学部の事業の中で最も重視したのは、青年文学会の開催であった。武田麟太郎は青年文学会を結成し、この若手のインドネシア人文学者アルミン・パネの下で啓民文化指導所の文学部員として働いた。一九四三年六月九日から青年文学会の講談会を一か月一回定期的で開催した。武田麟太郎が確実に読んだ彼らの作品は、帰国後の『ジャワ・バルー』に掲載されたウス

マル・イスマイルとアオ・カルタハディマジャの短編小説である。武田麟太郎がジャワを去った日から、『ジャワ更紗』の発行までの期間を見ると、アオ・カルタハディマジャの作品は「郷土のために！ (Boekan Karena Akoe)」(一九四四年四月)のみであったが、ウスマル・イスマイルには「チトラ、郷土は呼ぶ (Citra, Panggilan Tanah Air)」(一九四三年十二月)と「白帆 (Lajar Poetih)」(一九四四年四月)という二つの短編があった。ウスマル・イスマイルは、現地職場への作家派遣という事業のため、西ジャワのバギル市にあった綿の農園に派遣された。そこで創作した作品が、「チトラ、郷土は呼ぶ」である。この作品が、当時の郷土防衛義勇軍(PETA)と兵補(HEIHO)の参加と関連したものであることは、タイトルにも明示されている。

この両者は、青年文学会において特殊な存在であった。文学活動の指導のみならず、軍事訓練も受けさせた。ウスマル・イスマイルは、アオ・カルタハディマジャと共に、一九四三年十二月十四日に郷土防衛義勇軍(PETA)の訓練所に派遣された。このウスマル・イスマイルの体験は詩「朝の物語 (Kisah di Waktu Pagi)」の他、短編「白帆 (Lajar Poetih)」に書かれている。「白帆」は海に憧れる主人公の物語だと姫本由美子が指摘しているが、同時に郷土防衛義勇軍の物語でもある。結末では主人公が勝利の海辺を目指すと言い出し、この決意は、太平洋戦争への参戦を意味するものである。一方、「郷土のために！ (Boekan karena Akoe)」は、日本文学報国会の第二次大東亜文学賞のジャワ代表に決定した、その理由も、防衛義勇軍として育つ原住民の姿を描いたからである。

武田麟太郎がこれらの作品を、「遅しく延びて行くインドネシアの反映」として評価したことは、インドネシア人の青年文学会の作家たちの作品に郷土防衛の精神を注入したことを示している。戦後において、青年文学会の作家の一人であった評論者H・B・ヤシンは、啓民文化指導について次のように述べた。

様々な注文をつけられた作品を創作したため、人々は、日本軍部の印のついた啓民文化指導所を軽蔑するかもしれない。しかし、結果としては、この組織は我々の精神及び勢力を集中させ、当時も将来にも役に立ったことは否定できないだろう。(筆者訳)

つまり、啓民文化指導所の存在は、日本の敗戦後のインドネシア国民の団結、および芸術の向上にも繋がったと捉えればよい。元青年文学者のインドネシア人は、文学評論家、H・B・ヤシンをはじめ、「映画の父」とされたウスマル・イスマイルなど、独立後のインドネシア文芸界に大きな貢献を果たした。ウスマル・イスマイルは、啓民文化指導所時代の短編「チトラ、郷土は呼ぶ」を映画化し、時代の変化を迎えた若者の葛藤を描写した文芸作品として高く評価さ

れた。そのため、現在インドネシア最高映画賞は「チトラ」と称されている。彼は、独立後においても、菊池寛の脚本「父帰る」を上演し続けており、戦時中の文学が彼に深い印象を残したことは間違いない。彼らは、独立後のインドネシアにおける武田麟太郎の最大の遺産である。

## 第五章 武田麟太郎とパネ兄弟

第五章では、ジャワ時代の武田麟太郎と、パネ兄弟の文学、特にサヌシ・パネの文学を分析する。『ジャワ更紗』において武田麟太郎は、アルミン・パネを「インドネシア人による最初のインドネシア史の大著に没頭してゐるサヌシ・パネ氏の弟だけであつて」と、サヌシ・パネとの関係において紹介されている。サヌシ・パネは、インドネシア人作家の中で最も日本軍政に協力した文学者である。彼は宣伝部のマレー語報道機関誌『大アジア (Asia Raya)』や『東方文化 (Kebudayaan Timur)』誌などの運営にも深く関わっていた。

サヌシ・パネは、一九四三年四月一日に成立した「啓民文化指導所」の現地本部長となった。『ジャワ更紗』の引用にあるように、一九四二年に『インドネシア史』第一巻を書いていたサヌシ・パネの姿は、武田麟太郎の印象に残った。サヌシ・パネは、自分自身がオランダ学校の教育を受けた人間であるにも関わらず、西洋を重視する考え方に反発していた。サヌシ・パネは、文化と自然との関係の重要性を主張し、インドにおける東洋の優位性を見出す。インドは、サヌシ・パネにとって印象的な国であり、彼の文学の素材であった。サヌシ・パネは一九二八年から一九三〇年にかけての二年間、インドに滞在し、インド文化を直接体験した。そのインド体験は、オランダ語のエッセイ「インドの印象 (Impressies van India)」(一九三〇年) および、「インドの伝言 (De Boodschap van India)」(一九三〇年) に記され、次々と彼の作品に表現された。彼が最も多くインド体験を描いた作品は、一九二九年から一九三〇年にかけて創作された詩集『マダークラナ (放浪の歌)』(一九五七年) である。

彼はインド滞在中、劇本『アイルランガ (Airlangga)』(一九二八年) および『ガルーダが孤独に飛ぶ (Eenzame Garoedavlucht)』(一九三〇年) をオランダ語新聞『ティムブル (Timbul)』に掲載した。これらの文学の主な素材は、古代ジャワ王国である。サヌシ・パネは、ジャワ文化に馴染み深い古典文学『ラーマーヤナ』および『マハーバーラタ』の場面を連想し、インドを古代ジャワの文化として捉えている。

帰国後、サヌシ・パネは劇本『ケルタジャヤ (Kertajaya)』(一九三二年) を発表した。さらに、一九二八年十月の青年会議で上演した『マジャパヒトの夕暮れ (Sandyakala ning Majapahit)』が一九三三年にオランダ語新聞『ティムブ

ル』に連載された。これらの作品の素材も、滅びた古代王国の再現であるが、古代ヒンドゥー文化になかった、階級を超えた恋愛物語が出現している。劇本『ケルタジャヤ』における主人公、ケルタジャヤ王は、武士階級であるが、ブラフマン（ヒンドゥー教の指導者）の娘と恋愛関係を結び、相手の自決とともに情死する。『マジヤパヒトの夕暮れ』においても、サヌシ・パネの西洋的ロマン主義を見ることができる。

サヌシ・パネの詩も、弟のアルミン・パネに指摘されたように、ウィリアム・クロース (Willem Kross) および、セオドア・ワット (Theodore Watts) のソネットと重なり、ロマン主義者のオランダ詩人の文学技法を採用したものとされている。サヌシ・パネの初期作品、『愛の光熱 (Pancaran Cinta)』(一九二六年) や『雲の花 (Puspa Mega)』(一九二七年) などは、ほとんどパントン (スマトラの伝統詩) から開発したソネットである。

彼は古代インド文化を素材とすると同時に、西洋の技法も採用した。これは彼が理想とした、西洋と東洋の最良のものの融合である。『新人間 (Manusia Baru)』(一九四〇年) において、物語の場面はインドのマドラスであり、現代の生活を中心とするインド人の主人公が描かれる。サヌシ・パネは、ロマン主義から写実主義へと展開し、滅びた国というインド幻想からインドの現実に向かった。この作品には資本家と労働者の対立という、当時流行った社会主義の主題も見られる。しかし、物語の結末において、資本家の娘は労働運動家に心を奪われ、恋愛関係になる。サヌシ・パネの社会主義は、調和を目指したものであり、「階級の対立」というマルクス主義とは異なったものであることは明らかである。つまり、この作品の背景には、過去の東洋と近代の西洋の融合があり、サヌシ・パネの理想とする文化が作品化されたのである。

このようなインドにおける西洋＝物質、東洋＝精神というサヌシ・パネの見解は、まさに岡倉天心と同一の考え方である。サヌシ・パネと岡倉天心は世代が離れており、インドを訪れた時期から見ても、彼らの直接的な接触はなかった。しかし、タゴールとの関係において、二人の接点が見られる。タゴールが岡倉天心の親友であったことは周知のとおりである。タゴールは、サヌシ・パネにとっても偉大な存在であった。タゴールが一九四一年にジャワを訪れた際に、最も熱く迎えたのは、サヌシ・パネであった。彼はタゴールの詩「ジャワ宛」(一九四一年) をインドネシア語に翻訳し、タゴールの思想について、エッセイ「思想者としてのタゴール」(一九四一年) を書いた。

インド趣味から日本を中心するアジア主義へと転換する岡倉天心のパターンは、サヌシ・パネの愛国的な文学にも見られる。サヌシ・パネは、現実の世界におけるインドとインドネシアとの同一性を否定している。つまり、サヌシにおけるタゴールおよびインドへの興味は、古代インドネシア文化としての「イ

ンド」との関係にあった。そこでは、サヌシ・パネが、独特な文化をもつ独立国を目指したのである。

岡倉天心の思想は戦時中に再評価された。例えば、浅野晃は戦時中のエッセイ「東洋の理想」において、「私自身天心から非常に大きな影響を受けたのであるから、この戦ひの劈頭に召されてジャワへ行くと云ふことは、私として非常な光栄であったばかりでなく、天心の志を思ふ時に、一入感慨の深いものがあった」と述べる。この岡倉天心の思想は、「大東亜戦争」と関わった文化人にとっても重要な原動力となった。武田麟太郎もインドネシア独立を推進する際、この岡倉天心の思想に頼った。

サヌシ・パネは日本占領直前に、すでに日本に対する興味を抱き、日本とインドネシアとの接点を探る試みを行なった。彼は一九四二年三月十二日の日本軍ジャワ上陸のわずか三日後、『プマンダンガン』誌に日本語についてのエッセイを発表し、一年後に『日本語案内』という本にこれを掲載している。サヌシ・パネの日本語への興味に関して、当時の武田麟太郎は、「日本語はそのままに日本の精神」というサヌシ・パネ宛のメッセージを残し、応援の趣旨を述べている。岡倉天心の思想との類似という点でも、武田麟太郎におけるインドネシアへの愛着において、サヌシ・パネの存在が大きな役割を果たしたことは間違いない。武田麟太郎がパネ兄弟に手紙を残したのは、彼らの文学に共感できるもであったからである。インドネシアの「独立」を目指した帰国後の武田麟太郎の背後には、アルミン・パネのみならず、サヌシ・パネの面影も見られるだろう。

### Ⅲ 総合考察および結論

本研究は、これまであまり注目されることのなかったジャワ時代の武田麟太郎関連作品を対象とし、ジャワ時代の作家像および、ジャワでのインドネシア人との交流を論じた。ジャワ時代の武田麟太郎については、三つの時期に分けることができる。

第一は、ジャワ上陸からジャワ島巡回後の時期である。この時期の武田麟太郎は、積極的にインドネシアと日本との文化的な共通点を探っていた。身近にインドネシア文化と接触したのは初めてであり、「旅だより」などの初期の作品におけるインドネシア文化表象において、不自然な解釈、過剰な描写および誤解があったことは、確かである。戦況が順調であったため、この初期のジャワ時代、武田麟太郎は「大東亜共栄圏」の理想を本心で信じた可能性が高い。

この時期のジャワ文化の視察は、日本語で書かれており、現地新聞『うなばら』のほか、東京の『朝日新聞』などにも連載された。無論、その対象は一般の日本人である。しかし、武田は、異文化としてのジャワを、原住民と同じ目



線で解釈しようとする姿勢を示した。武田麟太郎は、主に巡回の体験を漫画という大衆娯楽を媒介にして書いており、ジャワの日常生活を描くことによって、新しいインドネシア像を再構築する狙いがあったことは間違いない。無邪気な子供の存在を、偏見をもった前世代の先入観をくつがえす象徴として、素直な目線による正当なジャワ文化の理解を追求した。ジャワ文化、特に日本人に馴染みがないイスラム文化との共存を狙う武田麟太郎像が提示できた。

第二は、演劇研究所解散後から、啓民文化指導所文学部指導長就任までの時期である。六月二十六日にインドネシア人の政治に関する言動、民族歌、民族旗が禁じられると同時に、武田麟太郎は文章が書けなくなった。この際、武田麟太郎は創作活動から離れ、実地的な活動へ移行した。しかし、演劇研究所および、啓民文化指導所の活動によって、パネ兄弟をはじめ、若手のインドネシア人文学者との交流が深まった。若手のインドネシア人文学者に愛国の精神を注入する姿が見られ、武田麟太郎とパネ兄弟との接点が提示できた。比較文学の観点から見ると、特に武田麟太郎とサヌシ・パネは、東洋文化を理想する文学者であることが判明した。

第三は、内地帰還から戦後までである。この時期の武田麟太郎作品は、ジャワ体験を振り返るものである。武田麟太郎がジャワ文化の真相を完全に把握できた時期であった。『ジャワ更紗』を執筆することによって、武田は全面的に批判を行なった。

『ジャワ更紗』を中心にして、日本人のジャワ像に対する武田麟太郎の批判について考察を試みた。武田麟太郎は『ジャワ更紗』において、竹越与三郎『南国記』（一九一〇年）、伊藤直矢『金儲けの爪哇』（一九一一年）、江川薫『南洋を目的に』（一九一三年）、加藤鏝五郎『蘭印は動く』（一九四一年）、入江寅次『明治南進史稿』（一九四三年）などの書名を挙げ、歴史的参考文献として文章を引用している。これらの作品におけるインドネシア表象および内容を分析することによって、オリエンタリズムの要素をもつ南進論著作の民族観を批判した。武田麟太郎は、明治以降の日本のオリエンタリズムにおけるインドネシアに対する偏見を変容させた人物でもある。この意味で武田麟太郎の『ジャワ更紗』は、もうひとつの日本的オリエンタリズムの特性を浮かび上がらせるものである。

敗戦後の武田麟太郎は、「戦争の時代は不勉強」だったという反省を述べたが、「単に否定して案じてゐるのは、少なくとも小説家の態度ではない。否定されるべきものは、しかし、十分に否定された後、その批判が自分の血肉になつてゐなければと云ふのである」と、彼は戦争中のジャワ時代の想いを容易に捨てられなかった。

以上、ジャワ時代の武田麟太郎像およびインドネシア人文学者との交流について、いくつかの変化過程を見出すことができた。このジャワ時代の武田麟太郎の研究は、インドネシア人文学と日本文学との接点を探る最初の段階として、有効な視点となるだろう。

武田麟太郎とインドネシア人文学者との交流を中核にしたこの研究においては、特にパネ兄弟に焦点を据えたが、他の南方徴用作家とインドネシア人文学者との交流も、今後の課題としたい。

#### IV. 主要参考文献

##### 一、日本語文献

- 芦谷信和編『作家のアジア体験—近代日本文学の陰画』（世界思想社、一九九二年）
- 浅田次郎（他）編『コレクション 戦争と文学 8 アジア太平洋戦争』（集英社、二〇〇二年）
- 浅田喬二編『「帝国」日本とアジア』（吉川弘文館、一九九四年）
- 浅野晃『浪漫派変転』（高文堂出版社、一九八八年）
- アルミン・パネ『桎梏—インドネシア文芸興隆期の珠玉作』（編集室らくだ、一九八〇年）
- 池田浩士『[海外進出文学] 論・序説』（インパクト出版会、一九九七年）
- 伊藤直矢『金儲けの爪哇』（実業之世界社、一九一一年）
- 井原西鶴『井原西鶴集』（朝日新聞社、一九四九年）
- 入江寅次『明治南進史稿』（井田書店、一九四三年）
- 浦西和彦・児島千波編『武田麟太郎』（日外アソシエーツ、一九八九年）
- 江川薫『南洋を目的に』（南北社、一九一三年）
- 大江賢次『アゴ伝』（帝制社刊、一九五八年）
- 大谷晃一『評伝武田麟太郎』（河出書房新社、一九八二年）
- 岡倉天心『東洋の思想』（講談社学術文庫、一九九三年）
- 奥出健「作家のアジア体験(1)—武田麟太郎のインドネシア」、『創造と思想』八号（湘南短期大学国語国文学会、一九九八年）
- 加藤鏖五郎『蘭印は動く』（国民新聞社、一九四一年）
- 神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家—戦争と文学』（世界思想社、一九九六年）
- 神谷忠孝・木村一信編『<外地>日本語文学論』（世界思想社、二〇〇七年）
- 河西晃祐「徴用作家北原武夫・浅野晃・武田麟太郎の「インドネシア」戦時期「南方」観の一考察」（『紀尾井史学二十一号』、二〇〇二年）
- 川村湊『南洋・樺太の日本文学』（筑摩書房、一九九四年）
- 姜尚中『オリエンタリズムの彼方へ—近代文化批判』（岩波書店、二〇〇四年）
- 木村一信編『南方徴用作家叢書 ジャワ編（南方軍政関係史料 25）』第一巻～第十五巻（龍溪書舎、一九九六年）
- 木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』（世界思想社、二〇〇四年）

- 木村一信『もうひとつの文学史—「戦争」のまなざし』（増進会出版社、一九九六年）
- キーン、ドナルド 徳岡孝夫訳『日本文学の歴史—近代現代編』（中央公論社、一九九六年）
- キーン、ドナルド 角地幸男訳『日本人の戦争—作家の日記を読む』（文藝春秋社、二〇一一年）
- クリーマン、フェイ・院『大日本帝国のクレオール〈植民地期の日本語文学〉』（慶応義塾大学出版会、二〇〇七年）
- 子安宣邦『「アジア」はどう語られてきたか—近代日本のオリエンタリズム』（藤原書店、二〇〇三年）
- 後藤乾一『近代日本と東南アジア』（岩波書店、一九九七年）
- 後藤乾一編『南洋便り・市来龍夫書簡集』所収「市来龍夫略年譜」（早稲田大学社会科学研究所資料シリーズ2、一九九一年）
- サイド、エドワード・W・、今沢紀子訳『オリエンタリズム』上下（平凡社、一九九三年）
- 庄野英二『絵具の空』（理論社、一九六二年）
- 十河巖『ジャワ旋風』（宋栄堂、一九四三年）
- 十河巖「ジャワの武田麟太郎」、『小説公園』（六興出版社、一九五七年四月号）
- 高見順『高見順全集』十九卷（勁草書房、一九七四年）
- 高見順『昭和文学盛衰史』（講談社、一九六五年）
- 武田麟太郎『武田麟太郎全集』第一卷—第三卷（新潮社、一九七七年）
- 武田麟太郎『武田麟太郎全集』第一卷—第十四卷（六興出版部、一九四六年）
- 武田麟太郎『ジャワ更紗』（筑摩書房、一九四四年）
- 武田麟太郎『世間ばなし』（相模書房、一九三八年）
- 武田重三郎編集『ジャガタラ閑話—蘭印時代邦人の足跡』（出版社不明、〇〇〇〇年）
- 竹越与三郎『南国記』（二西社、一九一五年）
- 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム—大正日本の中国幻想』（中央公論新社、二〇〇三年）
- 姫本由美子「日本占領期のインドネシア文学—啓民文化指導所に集まった作家たちの作品」、『アジア太平洋研究科論集』二十号（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科出版、二〇一一年）
- 舟知恵訳『ヌサンタラの夜明け ハイリル・アンワルの全作品と生涯』（彌生書房、一九八〇年）
- 文化奉公会編『大東亜戦争陸軍報道班員手帳（従軍随想）』（大日本雄弁会講談社、一九四三年）
- 文化奉公会編『大東亜戦争陸軍報道班員手帳（ジャワ撃滅戦）』（大日本雄弁会講談社、一九四三年）
- 町田啓二『戦う文化部隊』（現書房、一九六七年）
- 村井紀『南島イデオロギーの発生—柳田国男と植民地主義』（福武書店、一九九二年）
- 村松剛編『昭和批評大系 第二巻』（番町書房、一九三八年）

室伏高信『南進論』(日本評論社、一九三八年)  
矢野暢『日本の「南進」と東南アジア』(日本経済新聞社、一九七五年)  
矢野暢『「南進」の系譜』(中央公論社、一九七五年)  
矢野暢『日本の南進論と東南アジア』(日本経済新聞社、一九七五年)

#### 〈現地新聞など〉

『昭和十九年ジャワ年鑑』ジャワ新聞社、一九四四年(復刻版、ビブリオ、一九七三年)  
『赤道報・うなばら』(南方軍政関係資料 21)』(復刻版、龍溪書舎、一九九三年)  
『ジャワ・バルー新ジャワ(南方軍政関係資料 8)』一九四三年一月一日号～一九四五年八月一日号(復刻版、龍溪書舎、一九九二年)

## 二、 英語文献

Anderson, Benedict, *Java in Time of Revolution, Occupation and Resistance, 1944-1946*, (Jakarta: P.T. Equinox Publishing Indonesia, 2006)  
Bhabha, Homi K., *The Location of Culture*, (New York: Routledge Classic, 2004)  
Hutchinson, Rachel and Mark Williams, *Representing the Other in Modern Japanese Language, A Critical Approach*, (New York: Routledge, 2007)  
Keene, Donald, Japanese Writer and the Greater East Asia War, *The Journal of Asian Studies*, Vol.23, No.2, (Association for Asian Studies, 1964)  
Said, Edward W., *Orientalism*, (London: Penguin Books, 2003)  
Said, Edward W., *Culture and Imperialism*, (New York: Vintage, 1994)  
Schiller, Jim and Barbara Martin-Schiller ed., *Imagining Indonesia, Cultural Politic & Political Culture*, (Athens: Center for International Studies-Ohio University, 1997)  
Sudo, Naoto, *Nanyo-Orientalism: Japanese Representations of the Pacific*, (New York: Cambria Press, 2010)  
Teeuw, Andries, *Modern Indonesian Literature*, (Netherland Springer, 1967)  
Teeuw, Andries, The Impact of Balai Pustaka on Modern Indonesian Literature, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol.35, No.1, (University of London, 1972)

## 三、 インドネシア語文献

Armijn Pane, *Gamelan Jiwa, Kumpulan Sadjak-Sadjak*, (Bagian Bahasa Djawa Kebudayaan Departemen P.P. dan K., Djakarta, 1960)  
Armijn Pane, *Sonnet dan Pantun*, (Pudjangga Baroe, Volume.2, No.8, 1933)  
Armijn Pane, *Kisah antara Manusia*, (Balai Pustaka, Jakarta, 1953)  
Akhdijat K. Mihardja, *Polemik Kebudayaan*, (Perpustakaan Perguruan Kementerian P.P. dan K., Djakarta, 1954)  
Fandy Hutari, *Sandiwara dan Perang, Politisasi terhadap aktifitas Sandiwara Modern Masa Jepang*, (Ombak, 2009)  
H.B. Jassin, *Kesusastran Indonesia di masa Jepang*, (Balai Pustaka, 1975)  
J.U. Nasution, *Pudjangga Sanusi Pane*, (Gunung Agung, Jakarta, 1963)

- Sutan Takdir Alisyahbana, *Menuju Masyarakat dan Kebudayaan Baru*, Akhdiat K. Mihardja, *Polemik Kebudayaan*, (Perpustakaan Perguruan Kementerian P.P. dan K., Djakarta, 1954)
- Sanusi Pane, *Mandah Kelana*, (Dinas Penerbitan Balai Pustaka, Djakarta, 1957)
- Sanusi Pane, *Kertajaya*, (Pustaka Jaya, Jakarta, 1987)
- Sanusi Pane, *Sandhyakala ning Majapahit*, (P.T. Dunia Pustaka Jaya, Bandung, 2013)
- Keboedajaan Timoer*, No. 1-3, (Keimin Boenka Shidosho, Djakarta, 1943)
- Djawa Baroe*, (Djawa Shinboensha, Djakarta, 1943)

## V. 研究発表および論文

### 一、口頭発表

1. 武田麟太郎の『ジャワ更紗』 — 「同一性」をめぐって —  
第五〇回広島近代文学研究会、二〇一四年五月一〇日。
2. 武田麟太郎と「南進」著作について  
第二回広島大学言語文化教育研究会、二〇一五年七月二日。

### 二、投稿論文

1. 武田麟太郎の日本的オリエンタリズム — 『ジャワ更紗』における同一性論を中心に  
『比較文学』、第五七号、二〇一五年三月三十一日、八〇—九三頁。
2. 武田麟太郎と南進論著作  
『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部（文化教育開発関連領域）、第六四号、二〇一五年十二月一八日、二七五—二八二頁。
3. 武田麟太郎とサヌシ・パネ — 「東洋」文化の幻想 —  
『広島大学日本語教育研究』第二六号、二〇一六年三月二五日、五〇—五六頁。